

なし 雑人原にて首討れんは残念 故にこそ 斯様にはあれ 働か  
ば右の腕あり 日此の好みに首討給へと 小脇指を持出して 此小  
刀は仁田殿に参らすると 腹切隙も非ずとよ 雑人共不來内に早や  
討給へと 咽□へ刃太刀突き立る 今は心得て 仁田首を討落した  
り 誠に可惜 憫れむべし 十郎廿二才 一生涯終□ 栄耀の身に  
あらず 辛勞の上に命を落す 然れ共 六百年に及べども 曾我兄  
弟の孝心武勇 諸人の誉る事 萬代無双の高名 可□事也

付記

資料の閲覧、翻刻に際して御高配を賜りました宮崎県立図書館に、  
厚く御礼申し上げます。

〔平成十三年十一月三十日 受理〕

中々足元不定候条 別人へ被迎付候へと御断 既に両度に及けり

頼朝立腹あり 仁田は武勇難倫 隠なき者也 然るに我下知を違背

して 出間敷□□ 逆心反意の申条と 一度の上使重りたり 仁田

今は是非に不及 然らば奉畏と 薄炎香ひ之腹巻して 薄黄色の布

の狩衣 袖引違ひまくり上 立烏帽子に獅皮の行膝 長に着下して

太刀抜かざして走り出 大音にて 曾我兄弟は何方におはするぞ

頼朝の下知を蒙り 仁田次郎忠常参じたり 兄弟の内 壱人出給へ

勝負くと呼はたり 十郎聞て 即時躍り出 いか仁田 珍し

や 貴殿は亡父河津殿より人魂也 近年 我々へも親しく被申 満

足せり 殊に又 関東□□にある仁田殿に渡合 我首を渡さんは本

望の至也 先より早 二三百人も討たり 然れども 甲斐なき人の

雑色共 又 知行は取れ共 武勇の恥ある人に参合ず 雖然 此儘

にて無下□□有哉 いでや一勝負 運は互の武勇に有と 十郎進ん

で差し向 今迄 十郎擦り疵も不負□□置く 只きよの勝負と

懸る 仁田は請兼て 右の小鬘一ヶ所ひ□□まり 一ヶ所手負た

り 然れ共 仁田究竟の勇士にて 少しも不疼 請つ開い□□ 双

方龍虎の争ひ之内 仁田六ヶ所まで手負て 目くれ心も弛め共 微

塵も弛まず戦たり 十郎は宵より□ひ地を 彼方此方と辛勞し 雨

に□した□□上 三百人に及び 討たり 太刀の血 手の内に廻

り 伝ひくゝて不定 ひたと引くに打たりけり 余り強く打れて

太刀鏑本よりぼつきと折たり 其時に仁田が打太刀 十郎が左の肘

に当たり ふつと打落さる 十郎 今は是迄也 仁田殿 我首を討

て 頼朝殿へ上給へ 尻居に候ふと居□□り 仁田手負いながら立

寄て 首討たんとは思へども 流石に親しき祐成也 誤つて太刀折

たり 此故にこそ 今の躰 □□□首や討れじと 立上らんとする

所を 十郎は右の手にて 仁田が太刀の鞘を取て控へ 仁田殿 情

郎かい潜て押込んで。手厳しく打懸るに。荒言には似ざりける。新  
 貝は振返り逃行を。追かけて後様に一太刀背筋を切れ共。取て返  
 りもせず。□□と引退く。其次。甲斐の国の住人。市川の別当行房  
 が。二男市川次郎行光進み出て。曾我の面々闇紛の鼠輩。場中に出て  
 勝負せよ。甲州の市川なるぞと名乗りけり。五郎進み出て。汝が分  
 限にて。恥有武士に出合て太刀打は今が始めならんぞや。□□逃る  
 など走り懸り。刃横薙ぎに薙ぎたれば。両股を□□拂われ。二つに  
 成て。頭の方は一□斗脇へ転びたり。去程に。少し降り止みたる雨  
 又降り出して。車軸を流す。此故に。点したる松明。篝火も一時に  
 ばつと消へにけり。此時□震動騒ぎ出して。すはや。大軍乱れ来り  
 逆謀人有。一万余人の軍勢押来。鎌倉殿も御最期ぞや。和田。畠山  
 □討死なり□。無法の乱騒立此勢か□□きに。扱も続き□□きたり  
 太刀も古今の名作也。曾我兄弟が手に懸て。二百七人の死人。手負

は百二十拾人。枕を並べ。散乱せり。只両人の働き。古今往来げにや  
 例少なき兄弟也。頼朝公俄に下知有て□。平民部承上使として。陣  
 屋くを触流し。今晚の狼藉者は只式人の由。今迄被討留□□大  
 きなる油断也。急ぎ面々駈出。討留。首持参可申と下知有ける。然  
 ども。随一に働べき北条殿は時宗が烏帽子親□。畠山之来縁右の上  
 に。五郎を不便に思はるゝ。和田。三浦。土肥。岡崎は近き親類也  
 曾我の太郎。二の宮を始。武田。逸見。下河辺。皆曾我が一門続之  
 面々故。兄弟を討留めんと出合人は壺人もなかりけり。此故に。頼  
 朝公下知ありて。伊豆国の住人。仁田次郎忠常は。数度の武勇を顕  
 し。大勇猛の力士也。急ぎ仁田駈向て。可討留との上使也。仁田次  
 郎は。河津三郎以来別て兄弟に入魂。又。縁有仲也。兄弟が武勇を  
 畏るゝには非ず。又。討留る子細無之故。彼等は親の敵を討たる者  
 也。奔命も有者と思案して。御請申趣は。仁田は大きに酒に沈酔仕

に 右の小髻より左の耳の根に ずんと切割れ 右手に倒るゝ 十番之組頭九人迄討死して 今は早残りしは 豊後国臼杵八郎維信斗なり 大長刀を打振て 掛据へんと駆出たり 五郎見て 長道具は夜陰には大事のものぞや 手元に越され給ふなど 言ふより早く稲妻の如く 八郎が長刀の中ほど折て 打落して 片手拂ひに切たり 額を懸て胸先迄割付られ 二言ともなく死失たり 既に 頼朝の下知にておいゝ出たる大番組の拾番迄 頭分組中 皆兄弟に討たれ 十番切と名乗 雑兵は撫で切 討死手負式百余人 頃は五月廿七日の夜 小雨交りの真闇闇 丑之時より切出し 漸々半時間なり 目さすともなき聞き夜に 今又雨は一頻り篠を突く 上下うろたへ走り廻るを 兄弟は□捕を取て 相手を嫌はず 一太刀 □ 切て □ 走り散り 小柴垣に立隠れ 飛馬のごとし 適 日本無双の働き也 只 兄弟式人とは知る人更になく 如何様 敵は何に人と

も不知 大勢そ□平一面に騒ぎ匂りて 戦場に進む人こそなかりけり 十郎 時宗只兩人也 谷□□□□□見参に入 討留給はさ□□□ うろたへ給ふや 何とて松明出給はざるやと呼はりけり 小屋くの諸人これを聞 実にや 松明し出ざるは面々のうろたへ也 松明よくと 頻りに呼はり立たり 此時に 御馬屋之述行 大将の長柄之傘に火を付て 一番に差出す 見□□中より 簑笠雨具又は 鞍矢柄に火を立て投出く 飯屋くより数方の松明点し連れて出ければ 唯万燈のごとく也 此節 右大将家の御下知を蒙り 新貝荒治郎 松明を下人に持せて 手鉾提て走り出 曾我の面々不心得狼藉也 御大将の下知として 兩人の討手に新貝の荒治郎向たり 果報の曾我哉 荒治郎が武勇の太刀に死つこそ近比は仕合人哉と 走り出たるを 十郎躍り出て やさしくも能も出たり 其口た □ 太刀振上げて打□懸る 新貝鉾を上て突んとする所を 十

右の腕を打落されて □□□ 逃走り 北条殿之仮屋之内に逃入たり  
 弥駈<sup>ヒナ</sup>て来るにぞ 御所中之騒動 上を下へ返しけり 頼朝公下  
 知 番頭之筆頭目付役 吉甲小次郎維定 仰 急ぎ馳向 今晚之騒  
 動 人数之多少 子細を見届来るべしとの上意也 吉甲畏て 小具  
 足取て投掛 半首の兜を着て 鎚追取馳<sup>ハ</sup>せ廻り 夜討の敵は何者ぞ  
 勢の多少を見届よ 息な継せそ 急ぎ攻め付よと 大音にて呼はる  
 を 十郎此所に有 敵といふは兄弟二人なり 何程の事候へ□ 尋  
 常に勝負あれ 吉甲殿よ 真甲割られ給ふな 口こそ憎けれ ひつ  
 かう殿にしてくれんずと 片腕継て横殴<sup>ナク</sup>りにしたり 吉甲小次郎は  
 膝口を左右共にずんと薙<sup>ナ</sup>がれて 尻居に伏すを 返す太刀にて真向  
 二つに打割たり 今は 御殿も大きに騒ぎ 此牀にては如何 難心  
 得と 頼朝も騒ぎ給ひて 近習随一之武勇之達人 弓矢取て恥しか  
 らん □野天皇の後胤 海野小太郎幸氏 □田左衛門 急ぎ参り 狼藉

者を討留めよと 御意を蒙 一文字に走り出て 信濃国之住人 海  
 野小太郎幸氏也 曾我之者共 尋常に働け 名こそ惜しけれ 働け  
 くくと 勢ひ猛に匂り 如何成天魔も面を可向様あらじ 時宗是を  
 見 扱 広言哉 海野殿 貴殿は信濃□に名高き武士なり 必や国  
 之名折也 弓矢之ためし 相互に武士之太刀試しぞと 源氏重代友  
 切丸を真向に差しさざして一文字に出たり 海野も聞ゆる武士也  
 発□□へて 如何 時宗 只今海野が討太刀 冥途の土産と打込を  
 以て開ひて打込んだり 何かは以てたまるべき 海野が真向二つに  
 割て 俯<sup>うつふ</sup>しに倒るゝを 二の太刀にて 背をずんと割り付たり 続  
 て 宇田五郎信重 伊豆の国の住人ぞ 同国のよしみに介錯すべき  
 と 十郎に差向ふ 祐成大音にて 珍しや宇田殿 同国同氏の□□  
 にて 出生の国に隔てはなけれ共 武勇に□は可有ぞや 祐成が罕  
 人の太刀は 貧窮侍の打太刀 請外すと地獄ぞと 一文字に切出す

朝聞召て 不思議之事をなす者哉 三番四番組共に出て 可仕伏也

と 頻りに下知を伝へ給ふ 畏り 即時に彼之働き場に 組中雑人

四五十人駈出る 真先に大音にて 駿河之国之住人 岡部六弥太が

嫡子岡部弥太郎忠光也 曾我兄弟 如何宿意を以 御大将御旅館の

近辺を騒がする 二人共に出て首を伸べ 罪を請よと呼はりたり

雑人は声々に 十郎出よ 五郎出よと喚く所へ 五郎時宗大童に成

て 鉢巻して 荒れたる獅子の勢ひにて躍り出て 雑人原 時宗が

太刀風に 冥途の思ひ出仕れと 走り出たり 雑人共是見 すはや

五郎よ 時宗よと騒ぐ処を 腰の番 左右の腕 当るを幸ひ 追ひ

□□□すへて 五郎が一太刀よく討に 仮令 いか成人にても 請

留る事不叶 何の□もなく 打と拂と斗なれ共 大剛力の時宗が

最期の名剣と思ひ切ての働きなれば 只 風に木の葉の散るごとし

逃るを追懸□んで 既に場所は一町余りぞ進みたり 其内に 岡部

弥太郎 祐成に渡り合 二太刀三太刀打合わせる内に □中に打込

て 左右の指を打落さるゝ 太刀を落して 是非に不及 無刀なれ

共 益進み来れり 此節に 肩先かけて討捨て 五郎と連立ち 一

町斗り進て 又 此所に折居の□を垣にしたり 其所を小盾に取

敵は進み来と立ち騒ぐ 御所に討手段々討れて 敵は詰たる 四番

五番の番頭 原三郎清益 堀藤太家政二人 追取太刀にて躍り出て

大音にて 狼藉者は何方に居るや 曾我兄弟 □□出よくと 最

期の働き場と尋て進み行に 思ひ不寄 足元より 五郎時宗太刀振

りかざして 真向に打懸たり 大きに驚て 右頬先より顎の下まで

割付けられ 開かんとするに 続け打に切たりけるに 頭は二つ三

つに成たり 堀藤太は 十郎に小髻先より小耳の根迄被割付 二言

共なく成にけり かくて 其辺は 只阿修羅道の地獄の如く 死骸

は山に積んで無残の躰也 又六番に 加藤太郎光吉 五郎と渡合て

に引入て 又 打出る敵を待 中々に一人の働とは曾てみへず 既に  
 一番組の侍人ことぐくに討れたりとの沙汰頻り也 此故に 愛  
 甲三郎季隆 すはや大事之働き也 仮令 此者鬼神之働きすればと  
 て 何程の事可有ぞや 組中は其儘に 御殿之番を被致よと 相番  
 頭 加藤弥太郎と兩人 小具足を着流して 鎖り鉢巻括り付て 二  
 番に躍り出て名乗りけるは 鎌倉殿之番頭 横山党に愛甲三郎季隆  
 加藤弥太郎景遠也 曾我兄弟は自害やしつ 又は逃失けるや 出よ  
 くと呼はり 時に 柴土手の内より 二つ連れたる獅子のごとく  
 忿り 五郎先に進んで 愛甲殿と久しく対面なき内に 珍敷 太刀  
 先之面談 相互に知れたる仲と 必退き給ふなど 鏢元まで朱にな  
 りたる友切丸ひらめかし 討て懸る 愛甲も鎌倉中で撰ばれたる武  
 勇の者也 何とて一寸も退くべきや 向様□打合するに 何かは以  
 てたまるべき 五郎が太刀を請たれども 打引かれて 右の腕をふ

つゝと討落とされて くるりと廻るを 左の腕をも打落して 返す  
 太刀にて背を突て 場塞げ也と 弱腰取て 死骸を向様十里斗抛出  
 したり 十郎また 今古の手利ゝにて 劍術の達者也 加藤弥太郎  
 と打合するに いつの間にか 左右の首の根斜掛けに 雛の首の抜  
 けたる如くに飛んでけり 同場所に働んに妨と 是も右方に投出た  
 り 此故に 檢使之付に骸は脇にあり 惣じて 曾我兄弟の太刀先  
 にて 助る様に斬らばこそ 薄手は逃る 輩 差向に成ては中々可  
 叶にあらず 此時 十郎は五郎に向て 如何に時宗 此後よりも追  
 手出来るべき也 代りく其頭たる人と働くべし 雑人原と働とは  
 手間費也 悉く追返て 究竟の輩と手詰の勝負の 邪魔に不成様に  
 すべしと申さるゝ 勿論可斯 此次よりは 替りく 雑人打交り  
 の戦は休足分の働き 差向に名乗程の輩は 替りく仕留るべし  
 是も休足分の働ぞやと 先は暫く息を継居たり 既に この働 頼

て十人切といふべきに 人を討たる数 名字を名乗程の侍百七拾人

雑人百五拾人 合て三百貳拾人の内 死人二百四人 手負百二拾人

也 然るに 十人切と言ふは 頼朝公□□ 御殿□方の番組十組

有<sup>是ハ太□之七組徳川  
家之御普代御小姓組なり</sup> 今の世の拾式も 鎌倉より始めり 惣て此

拾人之頭は 武勇逞しき人を被撰たり 組中の姓名不及□ 頼朝下

知有 誰か有 十番組の当番□□早<sup>はや</sup>く出て首討て来れと下知有

折節泊番之差口に□ 平子右馬之允師重 腹巻取て投かけ 兜着る

間もあらざる故 鉢巻して 泊之近習廿人 皆素肌<sup>すはだ</sup>にて 追取太刀

御所□直に駈向ふ 彼の小山左衛門が小屋より出たり 小山左衛門

は兼而知たれ共 十郎は縁有 旁不知躰にいたり 去程に 平子左

馬允大音にて 何者なれば夜中に御所近く推参 かゝる狼藉<sup>狼藉</sup>を働く

名乗くゝとひしめきたり 十郎大音にて 先より度々名乗を聞なが

ら 事新しき向様かな 左宣<sup>之</sup>ふは誰人ぞと言ふ 時に 平子 鎌倉

殿之□番□ 武藏之国之住人 平子右馬丞師重也 其時に 五郎進<sup>す</sup>

んで云は 貴殿□未対面せず 是は曾我祐成 同時宗 樊噲をも欺

く 尋常に働け 一番に出たる社近比殊勝なれと云 平子下知して

廿人之組の侍  心得たりと抜つれて駈出たる 五郎沈と見

て 十郎殿は平子を討給<sup>たま</sup>へ 我は此大勢を巻付べきとて 源氏重代

友切丸を真向に差し<sup>さ</sup>かざし 廿人斗之間に駈入て 向者は面子割

左右は拂切 五郎が太刀先にたまらばこそ 九人まで切伏せたり

残る者共薄手深手を負て 散<sup>さん</sup>くに逃行 其内に 平子は十郎に渡

す 祐成見て 右馬丞尋常に働と 太刀差懸 打立り 十郎が太刀

荒くして 平子は肩先三ヶ所討れ 振返<sup>かへ</sup>り逃れんとする所を押付け

て 尻腰の所に討込んだり うんと言ふて のつけに倒るゝ所を差

捨にして 生死は不知 はかなき敵やと 太刀打振て 兄弟は彼之

前□□□の茂みをその儘に 下馬先のしきりに□て 構□柴垣の内



## 曾我根元評判大全 卷之拾四

## 本章

斯て 曾我兄弟 仇祐経を討て名乗かけ 既に 小山左衛門朝政  
 仮屋之前迄走り来れ共 誰一人出合人はなかりけり

十番切之□死人 討死貳百七人<sup>東鑑ニアリ</sup> 頼朝近習 守護の兵 十

番組有 頭一人づつ武勇之者願侍組五拾人づゝ有 此組十番□て討  
 死故 十番切と云

既に 今晚の騒動 御所近習迄騒ぎ匂る 然共 諸大名不出合

故に 頼朝公の下知として 其夜之当番平子平馬允師重 組之侍極  
 り番貳拾人の仕士を召し具して 一番に出て 十郎に討れ 此次追々

十番組駆向へり 愛甲三郎季隆 岡部弥太郎忠光 原小次郎 御所

黒弥五 堀藤太 吉甲小次郎 加藤弥太郎 舟越八郎 加藤太光員<sup>△かす</sup>

海野小太郎幸氏 宇田小四郎 臼杵八郎 拾三人は皆頭也 各究竟

之面々 御下知依て 組中共□追々駆出 一人□不討討れけり 武  
 士 雑人 貳百人に余り討れたり 既に富士野御旅館之前後は死人  
 の山を築 天晴 古今之働き 前代未聞の珍事也

去程に 兄弟之者共は 親の敵工藤左衛門祐経を討て 思ふ本望  
 を達し 項羽の怒り 祿山の勇を振ひ 兩人必死に究め 相手次第

の働と 大音にて名乗かけく 既に 小山左衛門朝政が小屋の前

に來り 関東の武士共 此推参を留めざるかと 声々に呼はる□に

も 出て 可討留と思ふ 和田 畠山 三浦 土肥 岡崎 北条を

始 武勇之面々は皆 曾我に荷担の心也 一家之人外 他家之面々

も 曾我を不便に思ひ 武勇を感じて不出合 既に 御旅館近辺之

騒動に成 富士野俄に震動して 何のわかちも知ざりけり 此故に

頼朝公 御殿に出給ひて 当番非番之近習を集めて 警固といふに

成り 先外に出合者無之故 御所中より出されけり 凡 大将にし

るといふこそ口惜けれ 老母も 兼て御暇申 其上 とりぐ形見  
 迄送り 死用意したる者が 幸にして相手なしとて古郷に帰り 其  
 果は如何に最期 幼年之時より 兄弟之者 敵を討ば 夫迄の命なり  
 生んとは曾て不思事にて候ぞや 只 時宗が存候は 向ふ敵のなき  
 といふ事は有まじ 若年ながら犬坊丸もあり 工藤が家人充滿せり  
 其外 御内之人々も 出合人こそ不運なれ 太刀の目針之続かん程  
 は 命限□働□と申ければ 十郎聞て打笑ひ いしくも被申たる哉  
 時宗や 何しに十郎が可退心之可有 二男なれば貴殿は逃れて 箱  
 根にも行 出家も遂よかしと 思ふ心の有つる迄なり 貴殿左様之  
 心なら□□ 構へて人種之有んほどは兄弟が手並を見せん 敵討ざ  
 る内には 木にも草にも心を置たり 今は早や 鎌倉殿も何ならん  
 いざや 今少し進み出て 可名乗也とて 小山左衛門朝政が飯屋の  
 前に立ち並んで大音上 最初より度々名乗るといへども 出合人も

なし 進み出て 狼藉者を留給へと 稠敷呼はる 此時節は 彼祐  
 経が方へ伏たる遊女共 逃出て 鎌倉殿の本陣広敷に躍り込んで  
 御所の近辺 狼藉あり 工藤左衛門は曾我兄弟に討れ 王藤内も切  
 られたりと 声々に呼はる 其内に 兄弟は頻りに名乗に 狩家中  
 震動して 四つ辻の篝火は焼立る やれ軍よ 夜討よ 狼藉よと  
 何の差し留めもなく 太刀よ 槍よ 弓よと立騒ぎ 馬 鎧 □に  
 て駆廻る 御所中震動して 出合人はなく 只大騒動のみにして  
 氣も魂も身に添せず 以之外の有様也 兄弟は心を一つにして 此  
 節より働出る 偏に天神のごとく也 此次 兄弟十番切也

り 只皆悦て 能ぞしたり 直に立忍べ かしとこそ思ふ人斗なれば  
 騒ぐ人はなかりける 中に和田義盛は 手勢い集め 十余人内飯屋  
 にあり 下宿に立 列卒雜人充滿せり 御所近辺の騒動 守護の為  
 とて 人数を有して 哀 曾我兄弟 此所に來れかし 匿ひて逐電  
 さすべきものと 今やくと待給ふ 外之面々も 皆此覺悟なれば  
 随分人は出合ざる也 去程に 兄弟は ひたと名乗て荒言すれども  
 誰一人不出合 静也ける程に とある馬屋の有ける脇に 椽の有け  
 る 五月雨闇真暗なるに呼はり 草臥て尻うち掛けて居たりける  
 此時五郎時宗心底には 相互に退んと思ひけるにや いかん 十郎  
 殿 斯様に名乗に 人一人も不出合は残念也 今は是 何方へ落ん  
 も自由也 思ふ敵は討たり 三浦には近き縁あれば 急ぎ和田殿之  
 陣屋へ入乱 軍之内に頼めば安堵すべきに 如何にやと申たれば  
 十郎聞て 時宗之被申事 左も有事ながら 我々兄弟 親の敵なれ  
 ば 是非を不論 飯屋に推参して討たり 此以後に 一門成共 三  
 浦 和田之家に入り 或は 曾我 二宮に入たらんには 成程 命  
 は可継事必定也 然ども 我々故に一門之難儀に成り 狩場之狼藉  
 者を抱 可差出との下知あらん 其節は武門之義也 滅亡するとも  
 出さるまじ 我々故に 外人之辛勞 近頃本意に非ず いざや 一  
 名乗せめとて立上り 又 如前 誰人にも出て止め給へと名乗共  
 ひそつと 何之沙汰もなかりけり 此時に十郎思ふ 五郎は次男な  
 り 若や同心せば 彼は永らへて 父兄の菩提をも弔はすべしと  
 如何に時宗 聞給へ 敵を討 暫く出合人もなし 是は 長々之狩  
 倉に諸人草臥たるや さては臆病神の付たるや 思へば老母も恋し  
 きや 五郎は一先落行て 母上にも 今一応対面して 工藤を討た  
 る子細も語り給へ 落は自由に忍ぶべし 如何にくと言ければ  
 五郎聞て 仰共不口 十郎殿之御詞や 凡 勇士之恥とするは 逃

一族なり 如何成宿業にや 一念瞋恚の敵となり 弓箭之難に合ふ  
 願はくば 因果之業縁を翻して 一念仏名の功德に引かれ 安養淨  
 利の台に座し給へと 兄弟打連れ 門外へ躍り出て 十郎申は 如  
 何に時宗 いざく 我々の家名を可名乗也 尤とて 二人の者  
 道の中に進み出て 高声に匂るは 遠からん人は音に聞け 近きは  
 寄て目にも見よ 鎌倉十九代之後胤 伊豆国之住人伊東小次郎祐親  
 が嫡孫 河津三郎祐泰の二人の子供 曾我十郎祐成 同五郎時宗  
 鎌倉殿之御旅館之前に推参して 親の敵 工藤左衛門祐経を打取  
 只今出たり 坂東八ヶ国之人々 我と思はん面々出て討留 將軍之  
 軍賞に与り給へと 大音にて呼はりたり 然と言ども 終日□□□  
 □ふ 又第一は草臥たり 又は酒に沈酔せり 又は 曾我兄弟は勝  
 たる勇士なれば 舌□ひみて 空耳潰す者無し 又 流石に親の敵  
 を討たる人を相手にも成まじ 旁以 出合人もなかりけり 祐成

時宗声くくに 二度迄こそは名乗けり 爰に 工藤小屋隣り 兎玉  
 次郎之一党 其並 横山の冠者 皆々勢にて並居たり 此騒動に  
 一番に出て 追取巻けど 既にひしめき 小具足打掛けく 手に  
 は鏑よ 長刀 松明にて 既に可打出之处 畠山次郎重忠は 兼て  
 本田次郎近恒に下知して 兄弟本懐を遂 既に声々に名乗時に 本  
 田次郎使者として 両隣 兎玉 横山に被申入は 曾我兄弟 独歩  
 之身にして 親の敵を討 勿論 工藤壺人之意趣にして 外へ対し  
 て 全く障り不可有 達而討留にも不及 御所之狩屋騒動 手前之  
 用心 不騒様に静を今の第一と被申触 何様 □□□聞へ 又  
 武者所の畠山殿之触也 此上には 面々出て制するに不及と 皆人  
 □を□て □人も不出合 随分穩便也 勿論 畠山次郎重忠 和田  
 左衛門義盛 三浦别当義澄 土肥次郎実平 岡崎四郎 曾我太郎  
 二宮の面々は 壺番に聞届るといへども 誰壺人出合人もなかりけ

追取太刀にて躍り出て 曾我兄弟之面々か 尋常に働□逢すまじき

狩家騒動兄弟論議之事

と立出たり 十郎 五郎 打連て 近頃推参也 汝原が為にも主君

斯て 祐成 時宗 門外に出けるが 十郎徒と思ひけるは 前後

同前 主人の工藤は義を不知 今の□期之悪き也 汝等も冥途の供

七つに切放したり 然る上は 何の止めの可入哉 然ども 親の敵

と 十郎が立向ふに 五百野三郎渡合 祐成が太刀を請損じて 左

を討ち 止め刺さざれば 実検之時 不調法に可成 殊に古法也

の肩先より乳の上までも切下られて倒るゝ 細野太郎は 時宗に渡

如何と被申 時宗聞て 相互に嬉しさの余り 忘れて候 某可仕に

合て 相戦ふ 何かは以てたまるべき 五郎の打太刀に袈裟に切は

て候 定て 漸□敵も駆出べくにて候 十郎は是にて働き給へと

なされ 是より 若侍うろたへ出るほどの者 片腕か 片小髻か

五郎は又 初めの場所へ立帰り 小刀を以 祐経が首の仏を押へ

片股か 皆撫で切にしたり 拾老入迄枕を並べて打倒したり 今は

如何 左衛門 慥に聞給へ 一年箱根にて 御辺の給はりたる小刀

暫く 出合人もなかりけり 外様 諸士 皆遠侍に居たりければ

也 只今返し候ぞ 能請取給へと 余りに繁く差程に 口耳一つに

此場に人も非ず 心静に息を継 茶の湯の水を吞て 竹椽之庭に立

成たりけり 此時之法を以 今に至て止めを差すは 小耳の根より

出て 腰打掛けてゆるりと休足したり げにや年来之宿意を達す

口のあたりに刺し貫く古実に成たり 此節迄 未人も出ざりし程に

一念不思議の兄弟なり 兩人が今の欣び 天にも上る勢ひ 獅子王

十郎 五郎一所に 日本の諸神に 兼て立願したる所々に一礼して

の如くなり

時宗は別て 箱根権現に御礼拝申て 兄弟立並て げにや 工藤は

如何に十郎が。五郎に情なき詞の可有哉。此文章は。兄弟の心底には非ず。

斯て。十郎は工藤が枕元に寄。五郎は跡に立つ。□真中に押取込  
扱も。祐経はうまく寝入たるもの哉。我々兄弟。年来之辛勞。眠り  
たる人を切るは。ひとへに死人を切に相同じ。起して討べしと言  
五郎。いかにもよかるべし。せめて暫の苦しみをさせん。起立時に  
思ふ儘に囚人にすべき也。其時に。年来の宿意を述べんと。兄弟は  
跡先に立て。柱之間を踏み鳴らし。いかに左衛門尉。能聞給へ。河  
津三郎祐泰が子に。祐成。時宗。二人之者参りたり。大事の敵を持  
つ者。斯様に打とけ臥といふ事や有。起きあがり。尋常に勝負し給  
へと言ふ。工藤目を覚まし。心剛強に有けり。太刀追取。□上らん  
とす。時宗後様に蹴倒して。細繩にて。声の不立様に割口にして  
左右の手を持合て。働かせもせず。十郎前に寄て。如何に工藤。優

曇華よりあいがたきは親の敵也。扱も祐経。佞奸にして。父河津殿  
を闇討にしたり。其仇を可報と。兄弟之者年来之憂苦勞。詞にも述べ  
がたし。扱。恨めしの工藤。しかも。他人にても有事か。思へば。  
嬉しや。工藤。□□之思ひ出只今也。五郎押へてあやれば。祐成殿  
匂り給へ。いやく。すかく逃なば。其儘に走らば。兄弟何迎  
神職の人を可討哉。王藤内は。肌着打着て。太刀追取。出向かはん  
と思しが。日頃聞及び。兄弟は武勇逞しく。不可叶と思ひ。大音に  
て。今晚の夜討は見知りたり。曾我十郎。五郎也。後日之證人某也  
と。広敷之方に逃げんとす。十郎。早く追付て。如何にや。御辺は  
王藤内。神職の人。長袖也。我々。何之意恨もなき人の。悪言許す  
べからずと。高股ずんと拂ひたり。王藤内。両股切放され倒るゝを  
時宗。真向二つに切割たり。此騒動に驚き。工藤が□居の家長。細  
野太郎。五百野三郎二人。心も剛に忠心もあり。兼て覚悟の前也

之庭より裏□□に來りて 自然の案内に深く忍たり 扱又 虎御前  
 心剛なる女にて 我導と知たる時は 兄弟之武功薄し 兎角知不知  
 殊に 今晚は寢所を替へたる事なれば よもや知り給ふまじ 忍び  
 込るゝ時の為にとて 宵は酒も不吞 工藤が寝たる跡にて 手燭を  
 照らして そよと風の吹にも心を配り 相窺ふ 時に 座敷の方に  
 人音する あわや兄弟の人々かと 手燭照らして そと差覗見たり  
 時に 兄弟只茫然たり 扱嬉しや □合たりと 妻戸を押開き 燈  
 火を背けて見たり 兄弟は すはや人よと 立隠る時 女手を上て  
 さし招く 五郎大きに仰天して あれは大磯の虎御前と囁く 十郎  
 打うなづき 立姿虎也 構て声立給ふなど 差足して竹椽の方に歩  
 行 虎は利発の人にして 此節に立廻り 忍て 和田殿の陣に入  
 いつの間にか 大磯に立歸れり 通賢女の才発 和国には珍敷人也  
 十郎 五郎は 虎が案内にて 手燭は残したり 取持て 折椽を廻

り 小庭の様成所を横に見ると 飯屋の庭の先に松明ばつと見へた  
 り すはや人よと 差覗けば 畠山殿の郎等 本田次郎 小具足着  
 して出立 打笑ひ 目礼して □脇にゐたり 兄弟嬉しく 重忠之  
 斯様迄介抱 心底に満足 一間の所に入て見れば 蚊帳二帳あり  
 一帳は工藤左衛門祐経 夢にも知らず 宵の酒に沈酔して 前後も  
 不知伏たり 手越の少将添伏 五郎 蚊屋の上方を切て押巻り 遊  
 女は夜着にくるみて 汝 必声をばし立るな 立れば突かんと云け  
 れば 両手を合せて拝む斗也 片脇に押やり 兄弟顔を見合せ 松  
 明点じて振上 目と目を見合せ打笑ひ 心之内如何斗ぞや  
 曾我物語 其外之書にも 此時十郎が 五郎は王藤内を切れと言  
 ふ 五郎恨みて 多年辛勞 王藤内を切る為に非ずと申たりと有  
 是大き成誤也 十七歳狙ひ詰たも 敵なれば 祐経を見て取詰たる  
 時は 王藤内事も何の事も頓着なく 兩人共に 工藤を討の心斗也

心を心がけてゐたり 兄弟悦て 心底の満足 一目見し斗にて打過  
 一間の所に忍入 案のごとく 工藤は前後も知らず寝入たり 先づ  
 四方の蚊屋を捲り 遊女を取て押くるみ 声立るなど押付 十郎が  
 枕元に立 五郎は跡に立ち 松明振り上げ 兄弟の悦び 不過之 祐  
 成大音にて工藤を起 即時に討たるに非ず 時宗は祐経が□□に乗  
 上りて 肩骨を引立 口に縄をはりこ□ 十郎側に立寄て 年来之  
 鬱憤を申述 五郎立上ると 工藤も太刀押取立上ると 祐成一ノ太  
 刀大□に打放したり 五郎は腰の番を打放す 年来之宿意 一時に  
 散ず 去程に 王藤内大音にて匂るこそ憎けれと 兄弟追懸て切倒  
 す 此太刀風に 近習の若侍廿人斗立出たり 兄弟抜つれ 大庭に  
 躍り出て 右右に切伏 立帰り 工藤に止めを刺して 表に出で  
 大音に名乗り 只一人出おふ者もなく 飯屋之陣中俄に震動して  
 只大地に震のするごとく也

工藤左衛門祐経は 心才発也 其上 今日十郎来り 酒一滴も不  
 吞 犬坊丸同伴して 飯屋住居を相窺へり 旁以て不心得 忍事は  
 成まじとは思へども 如何と思惟する所 家長 細野太郎 変を陳  
 て申は 曾我兄弟 逆も不可止 十郎 飯屋の住居を見る 斯様の  
 事共不心得 今晚はとかく御寝所を替へ給へ 用心覚悟肝要也 御  
 狩も既に今日斗 明晩は奥津之止宿也 兼て用意の座敷 何の心に  
 か可言 王藤内と一所に□□伏給へと述べ 侍少々召替へて 遠侍  
 の内□には細野伺候可仕 一向に用心し給へと陳言す 祐経聞て  
 勿論 羽なくしては此内飯屋へは可来様はなけれ共 自然の時之為  
 也と 戌の時頃 俄に思ひ立 密に寝所を替て伏たり□ 今晚宵の  
 程 兼て心に懸らるゝ 畠山殿は 家長本田次郎を召連れ 工藤が  
 用心厳しければ 若 兄弟仕損ずる事も可有 余所ながらに 見廻  
 りの様して 兄弟を可見届の内意にて 宵より 此辺を窺ひ 飯屋



## 翻刻『曾我根元評判大全』

卷之拾三、卷之拾四

後藤多津子

## 凡例

本文は底本通りに翻刻することを主眼としたが、読解の便をはかつて次の処置をした。

- 1 句読点に相当するところは一字あきとした。
- 2 仮名は現行の字体に統一した。
- 3 片仮名「ハ」「ミ」「ニ」は捨仮名の場合を除いて平仮名扱いとした。
- 4 仮名の清濁については、底本にない濁点を適宜補い、補った文字の右に・を付した。
- 5 漢字は通行字体を用いたが、慣用字は底本のままとした。
- 6 反復記号は底本のままとした。
- 7 明白な誤り及びわかりにくい宛て字は適宜改め、底本の文字を振り仮名の位置に残した。
- 8 底本に振り仮名がある場合は、その振り仮名にへ～を付して7と区別した。
- 9 脱字は「」内に補った。
- 10 損傷等により判読不能の部分は、字数のわかる場合には字数分の□で、字数のわからない場合には□で示した。

## 翻刻

曾我根元評判大全 卷之拾三

本章

曾我兄弟 既に寝所入 相窺ふ処に 寝所を替て居合せず 只茫  
然たり 此□ 黄瀬川の亀菊 折戸の方を押開き 案内見する 卒  
度差<sup>のそ</sup>覗き 手をあげ招て 手燭を渡して立去りぬ 是大磯の虎御前  
なり 兄弟は 連氏神の御引合せ 案内道標と悦て 竹縁の折□□  
□が前を□□過る 小庭の方に 松明ばつと振□□たり □□と  
思へば 畠山殿の郎等 本田の次郎 小具足着して案内 自然に用